https://printo.it/pediatric-rheumatology/JP/intro

四肢痛症候群

版 2016

5.成長痛

5.1どんな病気ですか？
成長痛は3〜10歳の小児におこる特徴的な手足の痛みです。
「小児期の良性の四肢痛」あるいは「再発性の夜間四肢痛」とも呼ばれます。

5.2頻度は？
成長痛は小児科ではよく見られます。男女差はなく、世界的に10〜20%の頻度で発症します。

5.3主な症状は？
痛みが両側の足（すね、ふくらはぎ、大腿、膝裏）に現われます。夕方から夜にかけて痛みがおこり、痛みで目を覚ます子どももいます。一般に痛みは身体を動かした後に起こると親が報告します。
痛みは10〜30分程度（数分〜数時間のこともある）続きます。痛みの程度は強い場合から軽度な場合までさまざまです。成長痛は断続的で、痛みのない日の間隔が数日から数か月続くこともあります。痛みは毎日起こるケースもあります。

5.4診断は？
検査で異常がなく、朝は痛みが消失する特徴的なパターンで診断します。血液検査やレントゲン写真は正常です。 しかし、レントゲン写真で他の病状を除外することが必要です。

5.5治療は？
良性の疾患であることを説明して患児と家族の不安を減らします。痛い時は局所的なマッサージをしたり温めたり、軽めの痛み止めを使います。夜間の頻繁な痛みがある患児には、夜にイブプロフェンを服薬するとよいかもしれません。

5.6予後は？

成長痛は重度な器質性疾患とは関係なく、通常は学童期で自然に消失します。年をとると痛みは100%消失します。